



特集 ニセ科学を斬る!



# ニセ科学の「波動」と物理学の波動

菊池 誠  
KIKUCHI Macoto



## ニセ科学と波動

ニセ科学の世界に「波動」というものが登場したのはずいぶん以前のことです。物理学の波動なら英語で wave でしょうが、ニセ科学の「波動」は vibration つまり振動です。これをだれが「波動」と訳したのか興味があるところですが、とにかく日本語では「波動」という言葉が広く定着しているようです。ただし、欧米でもニセ科学としての波動は言葉こそ vibration でも中身は wave に近い意味合いで使われることも多いので、この訳は絶妙、なのかもしれません。

では、ニセ科学でいう「波動」とはなにか。それは、すべてのものは固有の波動を持つという思想、もっとあからさまに言うならそういう妄想のことです。その波動に実態はありません。しかし、波動と名付けたことによって妄想はふくらみました。たとえば、波動なので共鳴現象が起きます。音叉を鳴らすと、近くにある同じ固有振動数を持つ音叉が鳴り出すという、あの共鳴現象です。波動の周波数が一致していれば共鳴が起きるはずだというわけです。この波動の共鳴を使えば、病気の診断をしたり治療をしたりもできるのだといいます。もちろんすべては vibration という言葉からの単なる連想ゲームに過ぎません。しかし、そう信じられているので

す。本稿ではそんな奇妙な「波動」について詳しく見ていきましょう。

## 物理学の波動

その前に、科学としての波動をちょっとおさらいしておきます。もちろん「波動」という言葉自体に怪しいところはありません。振動が伝わっていくものなら、なんでも波動です。水面を伝わる波はもちろん波動ですし、空気の振動が伝わる音波や空間を伝わる電磁波もすべて波動です。

物理学には、このような古典的な波動のほかに、量子力学の波動もあります。量子力学によれば、すべての粒子は波としての性質も持っていて、光のように回折したり干渉したりします。今では、電子が回折したり干渉したりする見事な実験ができます。逆に光もまた波としての性質と粒としての性質を兼ね備えていて、ひと粒の光が干渉するという一見奇妙な実験もできます。このように、「すべての物質は波動である」というのは極微の世界の物理学としては正しいのです。ただし、この量子力学の波動がシュレディンガー方程式という方程式できちんと記述されるものなのに対して、ニセ科学の波動は行き当たりばったりです。





## 波動の歴史

ニセ科学としての波動はさまざまな思想や妄想が合流したもののなので、「これが起源だ」と言うのはなかなかむずかしいようです。たとえば、波動の源流を遡っていくと、1908年に出版されたThe Kybalionという本に行き着きます。これは錬金術の祖とされるヘルメス・トリスメギストスの思想をまとめたものとされますが、この内容自体がおそらくは20世紀に捏造されたものです。そもそもヘルメス・トリスメギストスが実在の人物ではないのですから。それはともかく、そこに挙げられた、7つの原理のひとつが「波動の原理 (Principle of vibration)」です。ここでは既に「万物は波動である」という思想が表現されています。

1935年にはハロルド・サクストン・バーという研究者が生体の発生する波動について研究し、Life field (生命場)と名付けました。これもまた今でいう波動の源流のひとつです。実際、バーの思想に基づくと称するライフフィールドテスターという波動測定器は日本でも売られています。波動の測定器には思想とはまた別の歴史があるので、のちほど見ることにしましょう。

1970年代初めにフリッチョフ・カプラが「タオ自然学」という本を著して、量子力学と東洋思想の類似を説きました。これがいわゆるニューエイジ科学の始まりとされます。ニューエイジ科学以降、量子力学はオカルト的なニセ科学の分野で、不思議な現象を説明するために都合よく使われてきました。たとえば最近では、テレパシーを「量子絡み合い」という現象のせいにしてしようという試みがありますが、実際には量子力学を都合よくねじ曲げて解釈しただけにすぎません。ニセ科学の「波動」でもこの量子

力学が説明原理として登場することがあります。でも、決してシュレディンガー方程式できちんと記述されることはなく、ただ言葉が都合良く使われるだけなのです。

ここまでは、欧米(というよりアメリカ)での波動の歴史でした。日本のニセ科学分野での波動は、基本的にはニューエイジ科学以降にアメリカから輸入されたものと考えていいのですが、「万物は固有の波動を持つ」という妄想そのものは洋の東西を問わないらしく、日本にも大橋正雄氏の「波動性科学」というものがあります。日本で波動の普及をすすめている人たちの中にはこの大橋理論の影響を受けた人もいます。



## 波動測定器

今では江本勝氏が日本の波動の第一人者とみなされていると言っていいでしょう。江本氏はアメリカからロバート・ウェインストックが発明したMRA(磁気共鳴分析器)という装置を導入して、普及を図りました。これが日本で最もよく知られた波動測定器です。この装置は事実上、磁気とも共鳴とも関係ないインチキ装置なのですが、名前がMRIやNMRと似ているので、なんとなく意味のある装置のように思わせられてしまいます。

いっぽう、江本氏より早くから日本で波動を進めていた人たちもいます。たとえば、中根滋氏はバイオウェーブコンバーターと名付けた波動転写器を提唱していますし、また先ほど述べたライフフィールドテスターを販売する会社も昔からあります。江本氏よりあとに出てきたものとしては、バイオシーパルスという会社が波動転写器でマルチ商法を展開して事件になったのを覚えているかたもおられるで



しょう。

ところで、波動は妄想だと書いたのに、測定器だとか転写器だとかが出てくるのはいったいどうい  
わけでしょうか。実は波動の一番奇妙な点がこれ  
です。波動というものは実在しないのに、測定器はあ  
るのです。上で述べたようにさまざまな名前がつい  
てはいますが、基本的にはどの装置もみんな同じも  
のだと思ってかまいません。この手の装置の原型と  
なったのは、アメリカのアルバート・エイブラムス  
が20世紀初めに発明したラジオニクスという装置  
です。これは歴史的にも有名なニセ医療装置で、な  
んの意味もない電気回路でしたが、これを使って  
病気の診断などができるとされていました。

波動測定器はラジオニクスの焼き直しとってい  
いもので、やはり基本的には何の意味もない電子  
装置です。僕は小波秀雄さん(京都女子大)と一緒  
にバイオシーパルスの波動測定器を分解したことが  
ありますが、試料を載せる台には電線が一本しか  
つながっておらず、電気回路の中に組み込まれては  
いませんでした。では、これは何を測定していたの  
か。どうやら、測定者の体の電気抵抗を測ってい  
たようです。測定すると称する対象物の性質ではな  
く、測定者自身を測っているのです。波動測定は熟  
練した測定者でないと正しい値が出ないと言われま  
すが、さもありませんで、要するに測定者が好きな数  
字を出せるものだといいでしょう。

以下は伝聞ですので確認はできていませんが、  
波動測定器が実は何も測定していないことがはつき  
りしたとき、波動の専門家のあいだでは「なぜそれ  
で波動が測定できるか」が議論になったそうです。  
波動は実在しないという話にはならなかったとい  
うわけです。事実かどうかはさておき、波動のオカル  
ト性を物語るエピソードだと思えます。

## 波動を測る

いずれにしても、そのような装置で何を測るのか。  
スジャータで知られる「めいらく」は自社内に波動  
医科学総合研究所を持っています。そのウェブサイ  
トでかつて公開されていた資料では(今は見当た  
らないようです)、自社製品と健康との関係を調べて  
いました。波動測定器は測定結果を1個の数値で  
出します。数値の範囲は装置によって違いますが、  
-20から+20とか-40から+40とか一定の範囲の  
数値が出ます。

たとえば、ある食品が免疫によいかどうかは、測  
定器に免疫に関するコード(数値)をインプットし  
てから波動を測定します。-20から+20を表示する  
装置なら、+20が出ればその食品は免疫に最高の  
効果をもち、-20なら最悪です。+10くらいならそ  
こそこ効果があると判断するのでしょうか。この数値  
には単位がないことに注意してください。単位のな  
い測定値というのは科学測定としてはかなり特殊で  
す。もちろん、科学の測定でも単位のない測定値  
がないわけではありませんが、普通に考えるなら、  
測定値に単位がないということだけで、眉に唾をつ  
けるには充分でしょう。

さて、この波動測定がいかにか都合よいものかは、  
おわかりだと思います。食品をまじめに検査したけ  
れば、成分分析を行います。食品100g中にカルシ  
ウムが何mgはいつているとかビタミンCがどれだ  
けはいつているとかがわかるでしょう。でも、知り  
たいのはそんな成分のことではなく、「それは体に  
いいのかどうか」です。成分分析したって、その問  
いには答えてくれません。ところが、波動測定なら免  
疫に+19」とか「心臓に+15」とかズバリと答えてく  
れるのです。お墨付きを与えてくれるとは、なんと

便利な測定器ではありませんか。

そんなわけで、この波動測定をビジネスにしている人たちもいますし、有料の測定講習もあります。なかなか目のつけどころのいい商売ですね。気をつけて見ていると、パッケージに波動測定結果を書いた商品にときどきお目にかかります。もちろん、そんな数字にはなんの意味もありませんが、数値が出ているというだけで、科学的測定の結果だと誤解する人たちもいるわけです。

## 波動を写し取る

では、もうひとつの波動転写というのとは何か。「波動なので共鳴が起きる」という話を思い出してください。その共鳴を利用すると、ある物質の波動を別のものに写すことができるというのです。普通は波動を水に転写します。何か健康によいものの波

動を水に転写すれば、その水が同じ効果を持つようになる信じられています。つまり、水が波動の情報を記憶するわけです。

この「水の記憶」という考えかたは代替医療のホメオパシーとよく似ています。ただし、ホメオパシーが曲がりなりにも元の成分を薄めていくのに対して、こちらは転写ですから、元の成分は一切減らすことなく、いくらでも「健康によい水」が作れてしまいます。僕は「自分のおしっこの波動を水に転写する」という話も（実際にやっている人から）聞いたことがあります。いわゆる「飲尿療法」のハイテク版で、これなら誰にでも抵抗なく飲めるでしょう。

## 波動転写器の中を見てみよう

そうは言っても、波動を転写するという装置がある以上、どういう仕組みなのか知りたくなります。

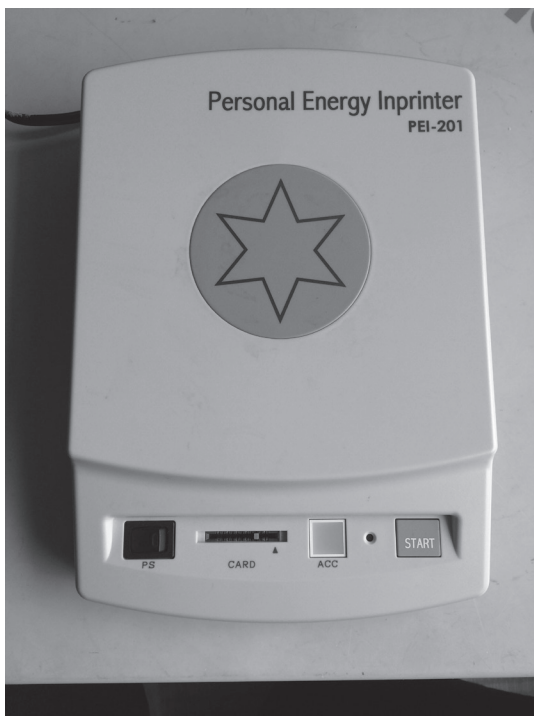


写真1 バイオシーパルスの波動転写器外観

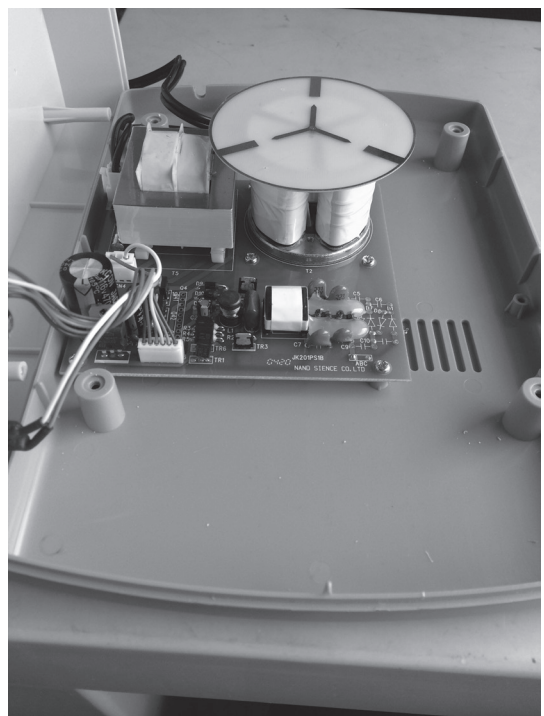


写真2 波動転写器の内部。トランスの横には三つの電磁石が円筒形に並んでいるのが見える



写真はバイオシーパルス社の波動転写器の外見と中の様子です。多くの波動転写器には、波動の転写元を載せる部分と転写先(普通は水を入れた容器になります)を載せる部分があるのですが、この装置はちょっと変わっていて、上面中央の丸い部分に水の容器を載せるだけで、転写元を載せる場所はありません。実は、波動は別の装置を使って小さなチップに記録し、転写器にはそのチップを挿せばいいことになっているのです。

中を開けてみると、電源用のトランスと三つの電磁石が目を惹きます。この三つの電磁石に流す電流を変化させることによって磁場の変動パターンを作り出し、そのパターンを水が記憶するという仕組みのようです。といっても、もちろん水は磁場のパターンを記憶したりしないのですが、どういふ磁場のパターンがどういふ効果を持つと、誰がどのようにして決めたのか、興味深いですね。ちなみに、この装置の説明書冒頭には前述した H.S. パーの言葉が引用されているので、パーの思想を受け継いだものであることがわかります。

さて、水は反磁性といって、磁場を避けようとする性質を持ちます。実際、水に非常に強い磁場をかけると、水が磁場から逃げるように水面が凹むが見られます。旧約聖書にモーゼたちが紅海を渡ろうとすると海の水が引いて通り道ができたというエピソードがありますが、それにちなんで「モーゼ効果」と呼ばれます。それほどの強い磁場をかけたあとの水でも、磁場を切ってしまうと元の水に戻るだけです。まして、この程度の電磁石が発生する磁場を記憶するはずはありません。それでも、さまざまな電子部品と電磁石で作られたこの回路を見れば、科学的な装置のように思えてしまうでしょう。まさに「ニセ科学」と呼ぶにふさわしいものではない

いでしょうか。

もちろん、あくまでもこの転写器がこういうものだっただけで、他の波動転写器が同じ仕組みで作られているのかわかりません。しかし、波動というものが実在しない以上、どの波動転写器も所詮は単なる「意味のない奇妙な装置」です。

## おわりに

結局のところ、ニセ科学の波動というのは実在しないものなのですが、なぜか測定器があり測定値が出るという「見てくれ」によって、なんとなく科学的な体裁を持っています。磁気だの共鳴だの生命場だの、なんとなく科学的な言葉も使われています。しかし、繰り返しますが、このすべてはまったく実体を持たない妄想なのです。なかなか壮大な話だと思いませんか。

この波動という分野の中から、日本独自の「水からの伝言」というこれまた奇妙なニセ科学が生まれました。また、やはり日本を代表するニセ科学である EM 菌の提唱者、比嘉照夫氏は、EM 菌の抗酸化効果の由来は波動であり、その正体は重力波らしいと著書に書いています。まさに「波動」は万能の「説明原理」として使われているわけです。その実在は誰も証明していないにもかかわらずです。

### プロフィール

きくち まこと  
大阪大学大阪大学サイバーメディアセンター教授。専門は統計物理学。著書に「信じぬものは救われる(共著)」「おかしな科学(共著)」「科学と神秘のあいだ」「もうダメされないための「科学」講義(共著)」。3月に、やさしい放射線の本が出る予定です